



復活祭第 6 の主日

瞽者 (こしゃ=目の見えない人) の主日

冒頭 P3 < 赤本 P1 >

司祭「父と子と聖神の国は崇め讃めらる、今もいつも世々に…」に続いて
 聖歌「アミン」「ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし…」 3 回

(♪) ハリストス死より復活し、死を以て死を滅ぼし、墓に在る者に生命を賜えり。

日本語
1

ハリストス 死より 復かつし 死を以て 死を 滅ぼし
 はかにあるものに いのちをたまえり

日本語
2

ハリス トス 死より 復 かつし
 死を以て 死を 滅ぼし
 はかにあるものに いのちをたまえり

スラブ語
3

スラブ語
 ハリストス ヴオスレ セ イメー ル ヴイ スーメル チ ユ スーメル チ ポッラッ
 イ ス シチュ ヴオ ラ ベッ ジ ヴオツ ダ ロヴァ

トロパリ、コンダク

P8 <赤本 P9-13>

主日 5 調「信者よ、父と聖神とともに」、「光荣は」、警者のコンダク「信を以て」、「今も」、パスハのコンダク「死せざるハリストス神よ」

5 調

信者^{シン}やちちと聖神^{セイジン}とともに、始め^{ハジメ}なきことは

わが救^{スク}いのため に、童貞^{ドウテイ}女^メよりうまれしものを

讃^ホめ歌^{ウタ}うて拝^{オガ}むべし、かれあま^{アマ}んじてその身^ミにて十字架

にのぼ^{ノボ}り、死^シを忍^シびその光^{ヒカリ}栄^{エイ}のふくかつにて、

死^シせしものを復活^{フクカツ}せしめたま^{アマ}えばな^ナり

♪「光荣は父と子と聖神に帰す」

【警者の主日 コンダク 4 調】

ハリストスよ、我^{ワガ}霊^{タマシ}の目^メのくらみたるものは

生まれながらの 警^{メイ}者^{シヤ}のごとく 爾^ニに就^ツきて 痛^{イタ}悔^イを以^テ

呼^ヨぶ 爾^ニは黒^ク闇^{ヤミ}にあるものもの 至^ツりて明^{アカ}らかなる光^{ヒカリ}なり

♪「今も何時も世々にアミン」

【バスハのコンダク 8調】

死せざるハリストスかみよ、なんじは 墓に くだれども、
 地ごくの力をやぶり、 勝つものとして復活せり、
 携香女に 慶べよと言い、 爾の使徒に平安を あたえ、
 滅びしものに 復活を たまえり。

【主や敬虔なる者】【聖なる神】へ戻る

ポロキメン

8調

主爾の神に誓を作して償へよ。

(句) 神はイウデヤに知られ、その名はイズライリに大なり。

主汝等の神に ちかいをなしてつぐなえよ

聖使徒行実の読み（16：16 ～ 34）

謹みて聴くべし

彼の日、使徒等が祈祷の所に適きし時、ト筮の鬼に憑らるゝ一の婢、我等に遇へり、ト筮を以て其主に多くの利を得しめたる者なり。彼はパウエル及び我等に從ひて、呼びて曰へり、『此の人人は至上なる神の諸僕にして、我等に救の道を傳ふる者なり』。日、久しく之を行ひしに、パウエル遂に之を厭ひ、顧みて鬼に謂へり、『我、イイスス・ハリストスの名を以て、爾に彼より出づるを命ず』。鬼、忽出でたり。婢の主は其利の望の空しくなりたるを見て、パウエルとシラとを執へて、市に有司等の前に曳けり。既に上官に曳き來りて曰へり、『此の人人はイウデヤ人にして、我等の邑を擾し、我等、ローマ人に受くべからず行ふべからざる例を傳ふ』。民も亦齊しく起ちて、彼等を攻め、上官は彼等の衣を褫ぎ、命じて彼等を杖うたしめたり。多く杖うちて後、獄に下し、獄吏に固く彼等を守らんことを命ぜり。獄吏、是くの如き命を受けて、彼等を内獄に下し、其足に梏を加へたり。

夜半の頃、パウエル及びシラ、祈祷して、神を讃詠せり、囚者之を聞けり。俄に大なる地震ありて、獄の基動き、諸門、皆、忽、啓け、各人の械は解けたり。獄吏、醒めて、獄の諸門の啓けたるを見て、囚者、逃げたりと意ひ、刀を抜きて自殺せんと欲せり。然れどもパウエル大なる聲を以て呼びて曰へり、『自ら戕ふ勿れ、蓋、我等、皆、此に在り』。彼、火を索めて、躍り入り、戦きてパウエル及びシラの前に俯伏し、彼等を外に導き出して曰へり、『君よ、我何を爲して、救を得べきか』。彼等曰へり、『主、イイスス・ハリストスを信ぜよ、然らば爾及び爾の全家、救を得ん』。乃、主の言を彼及び凡そ其家に在る者に傳へたり。彼は夜の即時に彼等を取りて、其傷を濯ひ、直に自ら其全家族と洗を受けたり。遂に彼等を引きて、己の家に入れ、食膳を具へ、全家と偕に神を信ぜし事を喜び。

アリルイヤ 8調

我を顧み、我を憐れみ給え。(句) 我が足を爾のことばに固め給え。



イオアン伝 (9:1 ~ 38)

彼の時、イイスス、行けるに生ながら警なる人を見たり。門徒、彼に問ひて曰へり、『夫子、斯の人の警にして生れしは、是れ孰か罪を獲たる、彼か、抑其親か』。

イイスス、答へて曰へり、

「彼も罪を獲ず、其親も亦然り、乃、彼に於て神の作為の蹟れん為なり。我、尚、晝なる間、我を遣し、者の作為を為すべし、夜、来る、其時は誰も為す能はず。我、世に在る時は世の光なり」。之を言ひて、地に唾し、唾を以て泥を成し、其泥を警の目に塗りて、之に謂へり、

「往きてシロアムの池に洗へ。(シロアム訳すれば遣されし者なり。)」彼、往きて洗ひ、見るを得て来れり。其隣の人及び先に彼が警なるを見し者曰へり、『此れ坐して乞ひし者に非ずや』。或、曰へり、『是は彼なり』、或曰へり、『彼に似たる者なり』、彼は曰へり、『是は我なり』。彼等、之に謂へり、『爾の目は如何にして啓けたるか』。彼、答へて曰へり、『イイススと名づくる人、泥を成して、我が目に塗りて、我に謂へり、「シロアムの池に往きて洗へ」と、我、往きて、洗ひて見るを得たり』。彼等、曰へり、『其人、安に在るか』。曰く、『我、知らず』。

此の警たりし者をファリセイ等に攜へ至る。イイススが泥を成して、其目を啓きし日はスボタ安息日なり。ファリセイ等も亦其如何に見るを得たるを問ひたれば、答へて曰へり、『泥を我の目に置き、我洗ひて見るを得たり』。ファリセイ等の中の或者曰へり、『斯の人は、神よりするに非ず、安息日を守らざればなり』。他の者曰へり、『罪ある人は、安ぞ是くの如き奇蹟を行ふを得ん』。是に於て彼等の中に紛論ありき。復、警者に謂ふ、『爾は彼の事に於て何を言はんか、蓋、彼は爾の目を啓きたり』。曰く、『是れ預言者なり』。

イウデヤ人は、其素警にして、後に見るを得たるを信ぜずして、此の見るを得たる者の二親を呼び至らしむるを待ちて、之に問ひて曰へり、『此れ爾等の子、爾等が警にして

うま 生れたりといふ者なるか、今如何にして見るか』。其親、彼等に答へて曰へり、『此れ我が
 こ 子なること、又、其 警 にして生れたることは、我等、之を知る、然れども、今、如何にして見
 われら これ し あるい たれ そのめ ひら われら し としちよう と
 るか、我等、之を知らず、或 は、誰か其目を啓きしを我等、知らず。彼は年長ぜり、彼に問
 みずか おのれ こと かた おや か い おそ よ
 ふべし、自ら己の事を語らん』。親の斯く言ひしは、イウデヤ人を懼れしに因りてなり、
 けだし 蓋、イウデヤ人、已に相謀りて、若し、人、彼をハリストスと認めば、会堂より黜けらるべし
 さだ こ ゆえ そのおや としちよう と い
 と定めたり。是の故に、其親は、『彼は年長ぜり、彼に問ふべし』と曰へり。

こ おい めいし ひと ふたたびよ これ い こうえい かみ き こ ひと
 是に於て警たりし人を再呼びて、之に謂へり、『光榮を神に帰せよ、我等は斯の人
 ざいにん し い そのざいにん いな われ これ ただひとつ
 の罪人たるを知る』。彼、答へて曰へり、『其罪人たりや否や、我、之を知らず、唯一の
 こと し すなわ われ もとめいし また これ い な
 事を知る、即ち我、本警たりしに今は見る』。又、之に謂へり、『彼は何を爾に為し、か、
 い か なんじ め ひら い われ すで なんじら しこう なんじらき
 如何にして爾の目を啓きし』。答へて、曰へり、『我、已に爾等に言へり、而して爾等聴
 なん また き ほつ あに なんじら もんと な ほつ これ
 かざりき、何ぞ復、聞かんと欲する、豈、爾等も彼の門徒と為らんと欲するか』。彼等、之を
 ののし い そのもんと もんと かた
 語りて曰へり、『爾は其門徒、我等はモイセイの門徒なり。我等は神がモイセイに語りしを
 しか こ いず そのひと こた い これ あや
 知る、然れども、斯の人の奚れよりするを知らず』。其人、答へて彼等に謂へり、『此は奇し
 き事なり、爾等は彼の 奚れよりするを知らず、然るに、彼は我が目を啓きたり。我等は神が
 ざいにん き しか も ひと かみ うやま そのむね おこな こ き
 罪人に聴かざるを知る、然れども、若し、人、神を敬ひ、其旨を行はば、斯の人に聴く。
 よ はじめ このかた いま ひと うまれ めいし ひら き き も こ ひと
 世の始より以来、未だ人の生ながら警なる者の目を啓きしを聞かざりき。若し、斯の人
 かみ あら なにごと おこな え これ こた い なんじ
 神よりせしに非ずば、何事をも行ふを得ざりしならん』。彼等、之に答へて曰へり、『爾は
 まった つみ うち うま しこう なんじわれら おし つい そと お いだ
 全く罪の中に生れたり、而して爾我等を教ふるか』。遂に彼を外に逐ひ出せり。

そのかれ お いだ き あ い なんじ かみ こ
 イイススは、其彼を逐ひ出しを聞いて、彼に遇ひて曰へり、『爾、神の子を信ずるか』。
 こた い こ たれ わ ため
 彼、答へて曰へり、『主よ、是れ誰なるか、我が彼を信ぜん為なり』。
 これ い なんじ すで かつ なんじ かた これ
 イイスス、之に謂へり、『爾、已に彼を見たり、且、爾と語る者は是なり』。
 い われ すなわち はい
 彼、曰へり、『主よ、我信ず、乃、彼を拝せり。』

以下変更箇所は「携香女の主日」と共通

「常に福」の代わりに「神の使い」

選択①ワラーム調 P28、〈赤本 28〉

ロシア、アメリカ、フィンランドなどで広く歌われている覚えやすいメロディ

かみのつか - い 恩寵満ちこうむるものに、
呼びてい えり、 いさぎよき 童貞女
よろこべよ、 またいう よろこべよ、
なんじの子 三日一目に はかよりふかつし、
死せしものを 起こせり。 ひとびとや
よろこべよ あらたなる イエルサリム
ひかりひ か-れよ、 主の光-栄は
なんじに かがやきたれば なり シオンよ、 いま
いわいて たの しめよ、 なんじ いさぎよき
生 神 女 なんじが 生みし 主の ふかつを
よろこび たま- - - え

領聖前に楽しく歌える歌 紹介

たとえばパスハのスティヒラ。古ロシア聖歌、ズナメニイ調によるスティヒラ 5 調による。スモレンスキーが合唱曲にしたものが有名です。

【ハスハのステイヒフ】5 調

(句) 神は興おき そのあだは 散るべし。

聖せいなるパスハ、 いま、我等に現あられたり、

新たなる パースハ ひみつの パースハ

至と尊ときパスハ パスハ ハリストス 救世主、

きずなき パースハ 大いなる パースハ

信者のパスハ 天堂てんの門を我等の為にひらくのパスハ、

凡すべての 信者を 聖せいにする パスハ なり。

(句) 煙の散るがごとく 爾彼等を 散らしたまへえ。

福音きんをつたえる おんなたち

来たりて 見たることを シオンに 告ぐべし、

ハリストスの喜ばしき福音^{ふくいん}を、われらより受けよ、

イエルサ リムよ、ハリストス王が 新郎^{はなむこ}のごとく墓より

出^いざるを見て、喜^{よろこ}びいわいたのしめよ。

(句) 斯^かく悪人等は神の顔^{かんばせ}に因^よってほろび、

ただ義人らは 楽しむべし。

香料^{たずさ}を携^{おん}うる女^{んな}たち あさはやく生命^{いのち}を賜^{たま}うものの墓に

来たりて、石^{いし}に坐^ませる神の使^{つかい}いに遇^あえり、

彼は斯^かく之^{これ}に 告^つげてい^いえり、

何^{なに}ぞ 生^なけるものを死者^{しや}の中に た^たずぬ^ぬる、

何ぞ 朽ちざる者を朽つるものとして かなしむ、

ゆきて 其の門徒に つたえよ。

(句) 主は此の日をつくれり、我等之を以てよろこび たのしまん。

たのしき パスハ パスハは 主の パースハ

いと尊き パスハ は われらに かがやけり。

パスハ に 因つて よろこびて たがいに

あいだく-ベ-し 鳴 呼

パ - - - スハ、

う れいより すくう ものや、 けだ-し いま

ハリストスは みやより するがごとく、

墓よりひかり出で おんな達を喜びに満てて
いえり、使徒等につたえよ。

(句) 光栄は父と子と聖神に帰す、いまもいつも世世にアミン、
復ふくかつの日、われ等祝いわいに照らされて、
たがいに相あいいなくべし、我等を憎むものにも
言うべし、兄だによ、復かつ活によって、
みなたがいにゆるしてかくうたわん、ハリストス
死より復ふくかつし、死を以て死を滅ほろぼし、
はかにあるものにいのちをたまえり。

「既に真の光」 P36<赤本 P36 >の代わりに「ハリストス死より」1回

終結 P38<赤本 P38 >通常は司祭が「ハリストス死より」前半を歌い、聖歌が続く。